

志學館大学日本語教員養成プログラム
ム（履修証明プログラム）に関する
アンケート調査の結果

平成29年6月

志學館大学日本語教員養成副専攻
志學館大学 I R室

日本語教員養成プログラム（履修証明プログラム）に関するアンケート調査の結果

1. 経緯と目的

志学館大学では、平成28年度に、学校教育法が定める履修の修了証明書を交付できる特別な教育課程（以下「履修証明プログラム」という。）を、本学の社会人教育及び社会貢献の柱の一つとすることを方針として決定し、平成29年度から日本語教員養成と地域学習アニメータ養成の二つの履修証明プログラムを開設することとした。

日本語教員養成プログラムは、従来から本学で開設されてきた日本語教員養成副専攻を社会人に対してより積極的に開放する形で開設することとした。これに際し、必要な場合、プログラムのカリキュラムと教育法を改善し、より目的に叶ったものにするために、本プログラムの間接的裨益者と想定される、外国人に対し日本語教育を実施している機関の意見を聴くこととした。

2. アンケート調査方法

アンケートの内容： 目的に従い、アンケートは、本学における日本語教員養成カリキュラムに関する意見を問うことを中心として、それに、回答機関の基本情報と履修証明制度に関する知識・認識度に関する問い、その他（自由記述）を含めて4部で構成することとした。

本学の日本語教員養成カリキュラムに関する問いは、現行カリキュラムの「社会・文化・地域」、「言語と社会」、「言語と心理」、「言語と教育」、「言語」の5つの科目区分に含まれる授業科目について、日本語教師として獲得すべき能力として、4：特に重視する、3：やや重視する、2：あまり重視しない、1：重視しない、の4段階で意見を問うた（上記の番号を各回答の得点とした）。なお、問いかけに際して、各授業科目の名称にシラバスに含まれるキーワードを付し、授業科目内容が理解しやすいようにした。上記に加えて、5科目区分以外での「日本語教師を目指す人に求める能力」について自由記述式の問いを設けた。

なお、本日本語教員養成カリキュラムは5区分22授業科目（44単位分）の必修・選択必修科目で構成され、そのうち32単位（必修24単位、選択必修8単位）の修得を修了要件としている。その科目表も参考情報として提供し、回答者の判断の助けとなるようにした。

アンケート対象機関： アンケート調査用紙を、全国日本語学校連合会「全国日本語データベース（平成29年2月18日現在）」に登録された日本語教育実施機関のうち、四国地方を除く近畿以西の208校に郵送し、同年2月28日～3月31日を回収期間として、アンケート調査を実施した。調査用紙が届いた201校（7校には不達であった）のうち、43校から回答が得られ、回収率は21.4%であった。

3. 結果の分析

3.1 回答機関について

回答機関の立地・規模等： 回答機関43校のうちでは、近畿地方と九州・沖縄地方が多く、両者を合わせて36校(84%)であった。一方、少なかったのは中国地方であった。43校のうち、学校開設以降10年以上20年未満が13校(30%)で最も多く、中には40年以上が1校、5年未

満が8校あった。規模の面では、日本語学習者数が100人未満と100人以上200人未満が多く、両者を合わせて30校(70%)であった。

これらの学校での常勤日本語教員数については、5人未満及び5人以上10人未満が多く、両者を合わせて41校(95%)であった。最も多いところでは、20人以上30人未満が1校あった。非常勤教員数では5人未満、5人以上10人未満、10人以上30人未満の3階級が多く、合わせて39校(91%)であった。最も多い50人以上は1校あった。

各機関での日本語教員(常勤・非常勤を含む)の最も多い日本語教育学習履歴は、民間の420時間以上の養成講座が19校(44%)で最も多く、大学の主専攻又は副専攻、日本語教育関係大学院がそれぞれ7校、4校、日本語教育能力検定試験合格が6校であった。

アンケートへの回答者の大半は、教務主任等の当該機関において日本語教育の実質統括者である職位の方々であった。また、彼らの日本語教師としての経験は、10年以上20年未満と20年以上30年未満が多く、最も長かった40年以上までを合わせて、32人(76%)が10年以上の経験を持っていた。このことから、得られた資料は、回答各校の考えを十分に反映したものであると考えた。

回答機関での日本語学習者：日本語学習者の国籍の多い方から2か国を問うたところ、86回答のうちでベトナム、中国、ネパールが多く、3か国を合わせて69回答(80%)であった。その他の国では、台湾、韓国があった。学習者のステータス(留学生、ビジネス関係者、日本人の配偶者等、研修生及び技能実習生、その他)で最も多いものを問うたところ、すべての回答で留学生がもっとも多かった。

3.2 履修証明課程の制度に関する知識・認識について

この制度が学校教育法に基づくものであるとの認識があったとしたのが12校、なかったのが30校であった。一方、履修証明書が日本語教育界に有効であるとしたのが29校、有効ではないとしたのが5校であった。学校教育法に基づくものであるとの認識があった12校に限れば、7校が有効である、2校は有効ではないと回答した。

3.3 本学のカリキュラムについて

本学の授業科目の重要度に関する認識についての分析結果を表1に示す。表でModeとあるのは、既述の回答4段階で最も頻度が高かった階級を示す。平均値は、4段階の得点の平均値である。なお、ここでの平均値の期待値は2.5であることに留意する必要がある。これらの値を基に、科目区分ごとの重要度に関する認識についても分析した。

各科目区分の重要度：5つの科目区分の中では、「言語と教育」の得点が3.8ともっとも高かった(3.8は「特に重視する」に近い)。ついで、「言語と社会」と「言語」の2区分の得点も3.5と高かった(3.5は特に「重視する」と「やや重視する」のちょうど中間である)。

一方、「言語と心理」(2.8点)と「社会・文化・地域」(2.9点)は評価が低く、ともにやや重視するより低かった(「やや重視する」と「あまり重視しない」の中間に近かったとも言える)。

各授業科目の重要度： 授業科目別では、「日本語教育実習」(4.0点)がもっとも高く、「言語と教育」区分の「日本語教育の基礎Ⅱ」、「日本語教授法Ⅰ・Ⅱ」、「比較教育概論」の得点は3.9又は3.8とおしなべて高かった。この区分では、「教育の方法と技術」の得点だけが、3.3とやや低かった。なお、「比較教育概論」のキーワード記載にミスがあったため、回答の信頼性に疑問が残ることを追記しておく。

その他では、「日本語教育の基礎Ⅰ」、「日本語と社会」、「異文化コミュニケーション」、「日本語学の基礎Ⅰ」、「日本語の音声」、「日本語の文法」の得点が3.5以上で高く、一方「日本の文学」は2.2で最も低く、唯一2.5を下回った。その他、「日本の歴史」、「開発教育」、「認知心理学」の点数が3.0を下回った。

これらの結果から、日本語、教育に直結する授業科目が重視され、日本語教員にとっての素養的な授業科目は重視されないという傾向が読み取れる。

表1 志學館大学日本語教員養成カリキュラム開講科目の重要度に関する認識の分析結果

区分	授業科目	Mode	平均値
1. 社会・文化・地域	(1) 日本語教育の基礎Ⅰ	4	3.6
	(2) 日本の歴史	3	2.6
	(3) 日本の文学	2	2.2
	(4) 開発教育	3	2.9
	(5) 民俗学概説	2	3.0
	区分領域平均値		2.9
2. 言語と社会	(1) 日本語と社会	4	3.5
	(2) 異文化コミュニケーション	4	3.6
	(3) コミュニケーション論	3	3.4
	区分領域平均値		3.5
3. 言語と心理	(1) 認知心理学	2	2.7
	(2) 学習心理学Ⅱ	2	3.0
	区分領域平均値		2.8
4. 言語と教育	(1) 日本語教育の基礎Ⅱ	4	3.9
	(2) 日本語教授法Ⅰ	4	3.9
	(3) 日本語教授法Ⅱ	4	3.9
	(4) 日本語教育実習	4	4.0
	(5) 比較教育概論	4	3.8
	(6) 教育の方法と技術	4、3	3.3
	区分領域平均値		3.8
5. 言語	(1) 日本語の表現	4	3.4
	(2) 日本語学の基礎Ⅰ	4	3.7
	(3) 日本語学の基礎Ⅱ	3	3.3
	(4) 対照言語学	4	3.4
	(5) 日本語の音声	4	3.7
	(6) 日本語の文法	4	3.6
	区分領域平均値		3.5

3. 4 日本語教師を目指す人に求める能力について

日本語教師を目指す者に求める能力についての自由記載へは30校が記入した。記載に現れたキーワードを、表2のように8カテゴリに分類し、カテゴリごとの記載数を集計した。なお、自由記載であるため、1校あたり複数のキーワードが現れた例も多く、表2の回答数合計は、回答校数より多い。なお、1校あたり一つのカテゴリに該当するキーワードが複数現れた時には、キーワード1つとカウントした。

出現頻度が最も高かったカテゴリは「社会人としての基礎」と言えるもので、社会人としての常識、社会への問題意識、自己/他者の感情の知覚、自分の感情をコントロールする能力、変化や想定外のことに対応する能力、精神面の強さ（忍耐力、柔軟性、判断力など）、根気強さ、バランス感覚と正義感と熱意、明るさ、事務処理能力などが挙げられ、11校がこれらを記載していた。

次いで多かったのが、「授業力・集団統制力・学生指導力」の教師の能力と言えるもので、実践的日本語教育、日本語や日本語教育の知識を運用し応用する能力、授業運営能力、自分で授業を創造していく能力、わかりやすく楽しく授業を作る能力、クラスコントロールができる能力、能力を見つけ出す指導、生活全般に関する学生指導（集団、個別、生活指導、進学指導等）などが挙げられ、9校がこれらを記載していた。

「異文化理解等力」、「協調性・他者の受容能力・共感力」に分類できるキーワードもそれぞれ6校が記載した。「コミュニケーション能力」、「日本語教師としての態度・言語教育観等」に分類できるキーワードも各5件あった。「評価・研究等能力・科学的態度」に関して2校、「近年の日本語学習者の動向に応える能力」に関して1件（看護、介護分野の知識を求めるもの）の記載があった。

表2 3.4 日本語教師を目指す人に求める能力についての自由記載及び
3.5 本学および卒業生等への意見・要望に現れたキーワードの分析

記載事項カテゴリ	3.4 回答	3.5 回答
(1) 社会人としての基礎	11	2
(2) 授業力・集団統制力・学生指導力	9	2
(3) 異文化理解等力	6	0
(4) 協調性・他者の受容能力・共感力	6	0
(5) コミュニケーション能力	5	2
(6) 日本語教師としての態度・言語教育観	5	1
(7) 評価・研究等能力・科学的態度	2	0
(8) 近年の日本語学習者の動向に応える能力	1	0
合計	45	7

3. 5 本学および卒業生等への意見・要望

この自由記述欄への記入は、10校と少なかった。結果は表2の最右欄に示す通りで、既述の「日本語教師を目指す人に求める能力についての自由記載」と似通ったものであった。具体的な提案として、通信教育の可能性を示唆したものが1校からあった。

4. 調査結果に関するまとめ

履修証明プログラムについて等： 履修証明プログラムの認知度は、日本語教育関係者の間では想定していたよりも高く、これの日本語教育界での有効性を挙げた者も想定したよりもはるかに多かった。

日本語教師の日本語教育学習履歴で、民間の420時間以上の養成講座と日本語教育能力検定試験合格者が多かったのは、意外であった。昨今の日本語教師不足等を反映した状況であろうと思われる。

履修証明プログラムのカリキュラムについて： 本学の現行のカリキュラムに対して、「言語と教育」に関する科目の評価が全般的に高く、次に「言語」に関する科目が高かったのは、現場の教育に直結した内容、またはその基礎力を養う科目群なので当然の結果であると思われる。一方、「社会・文化・地域」区分の「日本の文学」「日本の歴史」や「言語と心理」区分の「認知心理学」「学習心理学Ⅱ」の評価が低かった。「日本の文学」「日本の歴史」そのものを授業科目として日本語学校等で直接扱うことがないためと思われるが、日本語教員の教養として不要だとは言えないと考える。ただし、これらの意見は本カリキュラムを再検討するときの参考意見としたい。「認知心理学」「学習心理学Ⅱ」については、現場の授業には直接役立たないが、学習者の言語習得理論等を教師が知っておくことは指導上不可欠であろう。ただし、科目名では必要と思っている回答者も、キーワードから判断して必要と見なさなかった可能性もある。

日本語教師に求める能力に関する自由記述の内容と本学での対応について： 回答に現れたキーワードのカテゴリのうち、「社会人基礎力」、「協調性・他者の受容能力・共感力」と「コミュニケーション能力」は、特に日本語教員養成だけに求められるものではなく、大学教育の中でのキャリア形成に関わる課題である。これらの記載は合計22件で、登場したキーワードの49%であった。

残る約半数が、専門的能力に関するものであり、「授業力・集団統制力・学生指導力」、「評価・研究等能力・科学的態度」は教員養成一般に当てはまる事項であり、「異文化理解等力」、「日本語教師としての態度・言語教育観」、「近年の日本語学習者の動向に因應する能力」が日本語教員養成に特徴的な事項である。

これらの自由記述回答は、他の日本語教員養成プログラムを修了していてもありうるコメントとも言えるが、短期間の日本語教師養成講座出身者ならびに日本語教育能力検定試験合格者が多い現場からこそ出てくるコメントだとも言えよう。

本学の現行カリキュラムでは、「社会人基礎力」のうち、社会人としての「基礎的能力」と「常識」については、日本語教育の基礎Ⅰで部分的に扱っていると考えられる。「協調性・他者の受容能力・共感力」が求められる理由の一つとなっているチームティーチングについては、日本語学校等の状況を踏まえ、本学の教育実習では協調性を育むという視点から開設当初からそれを採っているが、もちろん現場で耐えうるほどの十分な時間はとれてはいない。

専門的能力のうち「授業力・集団統制力・学生指導力」で求められている「自分で授業を創造

していく能力」、「わかりやすく楽しく授業を作る能力」、「実践的日本語教育のできる能力」については、それを十分踏まえた指導をしていると考える。「異文化理解等力」では、「外国人が外国語で（直接法の場合）外国語を学ぶことに対するストレスや喜びを想像できる力」が求められているが、本学でも、日本語教育の基礎Ⅰ、日本語教授法で、直接法で学ぶ大変さやわかった時の喜びを体験する外国語学習の時間をわずかながら設けている。「海外留学体験」、「異文化接触体験」、「異文化理解」、「異文化を尊重する姿勢」との関連では、交換留学や留学生等との接触を折に触れて勧めているが、多くの学生が実行するまでには至っていない。「日本語教師としての態度・言語教育観」については、日本語教育の基礎Ⅰと日本語教育の基礎Ⅱで、部分的に扱っている。「評価・研究等能力・科学的態度」の中で、「評価方法」や「テスト作成」については、以前は扱っていたものの諸事情により近年は省略せざるをえない状況にある。「近年の日本語学習者の動向に伝える能力」として求められている「看護、介護分野の知識（浅くても可）」については、日本語教育の基礎Ⅰで扱う日本語教育の現状ならびに日本語教育教材の箇所を、若干は取り上げている。

以上のことから、課程教育の限られた時間の中ではあるが、本学の現行の日本語教員養成プログラムは、多くの日本語学校が教員に求める能力の多くを指導していると評価できると考える。

本学および卒業生等への意見・要望について： 「学習者からの具体的な質問に答える練習をする授業があるとよい」との意見があったが、これが実体験できるのは、日本語教育実習のみである。日本語教授法Ⅰ、日本語教授法Ⅱの模擬授業には外国人日本語学習者はいないので、想定される質問に答える練習などを行っている。「大学で実施するということで、養成講座とは違った特色があることを期待する」とのエールを頂いた。本学プログラムの特徴として、日本語教育実習を他教員/他機関に一任せず、本学専任教員がすべての実習授業にビデオ撮影しながら参加し細かい指導を行っていることが挙げられる。

最後に通信教育をとの提案を頂いたが、今後の検討課題としたい。

キーワード：感覚・知覚・認知の概念、視覚野、眼球運動、空間化など

- (2) 学習心理学Ⅱ (1)(2)から1科目選択必修／講義 (4 3 2 1)

キーワード：言語の生物学的・心理学的基盤およびその学習ならびに発達過程、応用行動分析

4. 言語と教育

- (1) 日本語教育の基礎Ⅱ 必修／講義 (4 3 2 1)

キーワード：音声/文字表記/語彙/文法および四技能別学習上の問題点と指導上の留意点、視聴覚教材の特性など

- (2) 日本語教授法Ⅰ 必修／演習 (4 3 2 1)

キーワード：コースデザイン、教案作成法、初級総合教材研究、初級模擬授業、A-L 教授法、TPR、CA など

- (3) 日本語教授法Ⅱ 必修／演習 (4 3 2 1)

キーワード：中上級教材研究、教案作成法、中級模擬授業など

- (4) 日本語教育実習 必修／実習・演習 (4 3 2 1)

キーワード：教材研究、他機関の日本語授業見学、初級実習授業、中級実習授業など

- (5) 比較教育概論 (5)(6)から1科目選択必修／講義 (4 3 2 1)

キーワード：教材研究、他機関の日本語授業見学、初級実習授業、中級実習授業など

- (6) 教育の方法と技術 (5)(6)から1科目選択必修／講義 (4 3 2 1)

キーワード：ICT 活用指導力、ICT 活用による教材作成・授業設計、タブレット活用と学習支援システムなど

5. 言語

- (1) 日本語の表現 必修／講義 (4 3 2 1)

キーワード：日本語の文字体系、メール、パラグラフ・ライティング、プレゼンテーション

- (2) 日本語学の基礎Ⅰ 必修／講義 (4 3 2 1)

キーワード：日本語の文字、音韻・音声、語彙、文法

- (3) 日本語学の基礎Ⅱ 必修／講義 (4 3 2 1)

キーワード：地図・ことばの仕組み・コミュニケーション・社会の変化から見えることばの地域差など

- (4) 対照言語学 必修／講義 (4 3 2 1)

キーワード：第二言語習得研究、言語類型論、日本語と英語・中国語・韓国語との比較対照など

- (5) 日本語の音声 必修／講義 (4 3 2 1)

キーワード：日本語の子音、母音、音節とモーラ、アクセントなど

- (6) 日本語の文法 必修／講義 (4 3 2 1)

キーワード：形態論、品詞、統語論、文法カテゴリーなど

6. その他（自由記述）

上記1～5の項目以外で、日本語教師を目指す人に求める能力があれば、ご記入ください。

IV. その他(自由記述)

本学学生・卒業生に関すること、本学に対するご意見、ご要望など、ご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

※参考情報 志學館大学日本語教員養成プログラム（履修証明プログラム） 科目表

区分	本学における授業科目	単位数	開講期	授業形態	必修
社会・文化・地域	日本語教育の基礎Ⅰ	2	前期	講義	2
	日本の歴史	2	前期	講義	} (2) 1科目 選択必修
	日本の文学	2	前期	講義	
	開発教育	2	後期	講義	
	民俗学概説	2	前期	講義	
言語と社会	日本語と社会	2	後期	講義	2
	異文化コミュニケーション	2	前期	講義	} (2) 1科目 選択必修
	コミュニケーション論	2	前期	講義	
言語と心理	認知心理学	2	前期	講義	} (2) 1科目 選択必修
	学習心理学Ⅱ	2	前期	講義	
言語と教育	日本語教育の基礎Ⅱ	2	後期	講義	2
	日本語教授法Ⅰ	2	前期	演習	2
	日本語教授法Ⅱ	2	後期	演習	2
	日本語教育実習	2	後期	実習・演習	2
	比較教育概論	2	後期	講義	} (2) 1科目 選択必修
	教育の方法と技術	2	前期	講義	
言語	日本語の表現	2	後期	演習	2
	日本語学の基礎Ⅰ	2	前期	講義	2
	日本語学の基礎Ⅱ	2	後期	演習	2
	対照言語学	2	前期	講義	2
	日本語の音声	2	前期	講義	2
	日本語の文法	2	後期	講義	2
	計				